

随順化する自然 (二)

——ナンキンの品評会とその選評基準——

野 地 恒 有

一 改造技術のゆくえ

金魚の飼育のおもしろさは、自然の状態では存在しないもの、珍奇なる自然物を作り出すことにある。その珍奇なる自然物は、新品種を作り出すのではなく、固定された品種のなかで、抽象的に示された理想体に限りなく近づけようとする、象眼細工のように理想にはめ合わせようとする技術によって作り出される。その改造技術の様態を「嵌合」といった。金魚の飼育とは、固定された品種のなかで、理想体に嵌合しようとする改造技術のことであり、金魚の品評会における観賞とは、その嵌合の度合いを評価することである。

金魚の飼育について、自然と人間の関係からまとめれば、それは自然の人間への随順化とまとめられる。金魚飼育を支える心意は、自然を人間に倚り傾かせ、自然を随順させる愉悦にある。

金魚の飼育・観賞で指摘した理想体に嵌合しようと改造技術

は、朝顔の栽培にもみられる。そこにも自然の随順化が指摘できる。明治三五年に結成された名古屋朝顔会では、蔓を伸ばさずに葉を小さくして、中心に大輪の花を咲かせることが特徴である。これを「盆養（盆栽風）切り込み作り」という。花の色には、白・桃・紅・茶・紺青・浅黄・黒鳩があり、花の模様には無地・覆輪・縞があり、葉の柄にはキフセ（黄色斑入り）・キセ（黄色）・アフセ（緑色斑入り）がある。どのような朝顔になるかは、あらかじめ種子の段階で管理されている。たとえば、花が白無地で、葉がキフセの朝顔は「白妙三号」と呼ばれ、その種子が会で用意されている。種類ごとに分類された種子のなかから、会員は好みの種子を手に入れることができる。種子の段階で花や葉の色や柄を改造するのではなく、成育のプロセスにおいて、蔓を伸ばさないで葉の中心に大輪の花を咲かせるという全体的な姿を理想体に近づけることが栽培の技術となっている。理想の姿にできるだけ近づけることが栽培に苦心して、そのはめ合わせ得た度合いにより品評会で審査される。

これまでもくり返し述べてきたが、金魚を飼育する立場には、経済的活動を別とすると、①一般家庭で飼育する者と、②熱心な愛好家として自家で採卵・孵化・育成して優秀な金魚を飼育する者に大別される。本稿でいう飼育は②の立場からとらえている。

新聞によると（『朝日新聞』二〇〇三年一月二五日）、いま飼っている、あるいは飼ったことのあるペットに関するアンケートを読者モニターを対象におこなったところ、最も多く回答を集めたペットは金魚であった。約八五〇人中四七六人が飼ったことがあると回答した。「子どものころ、縁日で金魚すくいをやり、そのまま飼ったという経験は世代、男女の壁を越えて受け継がれている」とある。金魚を生活の中に取り入れて飼育を楽しもうとする一般の人々は、幅広くみられる。しかし、こうした①の人たちと②の飼育する人たちの間には、その飼育の態度に大きなへだたりが見られる。①の人たちには理想体への改造という意志はなく、金魚を生活のなかに取り入れて、生き長らえさせておくことで「癒し」とか「なごみ」を求めている。それに対して、②の人たちは、品種の維持・継承を図り、品種としての理想体に改造しようとしている。自らの技術で理想体を実現し得たところに喜びや快感があるが、その心意は「癒し」や「なごみ」とは対極に位置する金魚と人間の緊張関係に支えられているといえよう。金魚を飼育し観賞する態度は二極化している。

近年、熱帯魚に押され気味であった金魚の人氣が、復活の兆しを見せていると報じられた（『朝日新聞』二〇〇三年七月一七日）。金魚柄の浴衣や小物が売れ、飼育をはじめ人も増えているという。ここでは、金魚に対して、「赤いべべ着たかわいい金魚」というかわいらしさ、夏の風物詩という季節感やなつかしさといった固定的なイメージが観賞されているのだ。そこに珍奇なるもの、標準形からはずれた自然を求める心意はない。金魚のもつ定形化したイメージにこそ「癒し」や「なごみ」が求められているのだ。

金魚も熱帯魚も、標準形からはずれた珍奇なる自然の飼育である。熱帯魚は、明治時代には輸入されたが、一九五〇年代後半から広く普及して以来、数多くの種類の熱帯魚が輸入されてきている。熱帯魚とは観賞用に飼育される熱帯性・亜熱帯性の魚類（おもに淡水魚）のことである。熱帯魚では、金魚では得られない多様な形や色が観賞される。しかし、熱帯魚の飼育には、交雑による新品種の作出や形態の改変といった改造の技術は、ほとんど見られない。日本には存在しない多種多様な自然をそのまま受け入れているという形で珍奇なる自然が求められている。熱帯魚の飼育には、改造への志向を弱めながら、珍奇なる自然への志向を強めていることが指摘できる。

金魚から熱帯魚への方向、さらに近年のペットブームにみられるように、珍奇なる自然を求める傾向は多岐にわたって加速してきている一方で、逆に、夏の風物詩としての金魚にみられ

るような伝統的な定形化したイメージへ向かう動きも見られる。そのなかで、②の立場の人たちの金魚飼育や朝顔栽培にみられたような珍奇なるものを作り出す改造技術そのものは孤立化し衰退してきている。

二 ナンキンの品評会

ナンキンとは金魚の品種名である。体形の特徴は、背びれがないことである。ランチュウやオオサカランチュウにも背びれがないが、ナンキンの場合、それらにあるような頭の肉こぶがなく、頭が小さくとがっている。体色は白を基本として、白色だけのものもあり、そこに赤が入るものもある。

このナンキンは、島根県出雲地方を中心に飼育されている。その愛好団体として、松江市のいずもナンキン振興会、出雲市の出雲ナンキン愛好会、大社町の大社錦魚会、宍道町の宍道錦魚会がある。

いずもナンキン振興会による品評会は、毎年一〇月中旬に松江市総合体育館横の松江市北公園で行われている。平成一七年には一〇月一六日に行われた。

品評会は、親魚、二歳魚、当歳の三つの部に分かれて行われる。公園の広場には、審査池と、三列にたらいが並べられている。写真1を見てみよう。三列のテーブルは、写真1に向かって左から、当歳魚、二歳魚、親魚に分けられている。テーブル



写真1 ナンキンの品評会

に並べられているたらいには、まだ金魚は入っていない。たらいの並びは、それぞれの部門における順位の順になっており、写真1に向かつて右から上位の順になっている。別の審査池で審査され、順位に従って、三列のテーブルに入れられていく。親魚の場合、十八個のたらいが並べられており、順位は、向かつて右下から、最優秀魚、優魚一席から三席、入選一席から一四席になっている。二歳魚と当歳魚では、二十二個のたらいが並べられており、順位は、向かつて右下から、最優秀魚、優魚一席から五席、入選一席から一六席になっている。

写真1に向かつて左、三列のテーブルの奥のテント前に人だかりができていますが、そこに審査池がおかれており、そこで審査が行われている。また、写真1に向かつて右、三列のテーブルに対して直角におかれているテーブルがある。そのたらいには、審査員の親魚が出品されている。

九時二〇分から親魚の審査が始まった。審査は三人で行われる。まず、出品者は、出品する親魚を一つのたらいに一匹を入れてエントリーする。一人五匹まで出品できる。そのたらいから役員が親魚を審査池に移す。審査池には三〇匹ぐらいの親魚が泳いでいる。どれが誰の金魚であるかは、わかるのだという。審査池を泳ぐナンキンを、審査員二名が見ていく。そこから、上位のものから選んで取り出していく。写真2は、審査池での審査の様子であり、横のたらいに、選ばれたナンキンが入れている。同時に、審査外のものをはねていく。選ばれた

親魚は三列のテーブルの親魚の列のたらいに、上位の順に移されていく。写真1に向かつて右下、三列テーブルの奥のテーブルのところに入らだかりができていますが、これは、審査の結果が出た最優秀魚、優魚一席から二席あたりの親魚がたらいに移されてあって、それを参加者が見ているところである。

一〇時過ぎに親魚の審査が終わり、次に二歳魚の審査が始まる。一一時三〇分頃に二歳魚の審査が終わり、最後に当歳魚の審査。当歳魚の場合、エントリーの数が多かったため、審査池に入れる以前に、審査員が審査池に入れるものを選んでから、その目になつたものを審査池に入れた。

一三時にはすべての審査が終了した。順位がついて、三列のテーブルのたらいに入れられたナンキンには、それぞれのたらいに順位と名前の札が入られる(写真3)。

一四時三〇分頃から表彰式。それぞれの部の入選三席までと、総合優勝、準優勝、顧問賞、審査長賞が表彰される(写真4)。平成一七年度の場合、総合優勝と準優勝はなしであった。



写真2 審査池



写真3 入賞したナンキン



写真4 表彰式

三 選評基準

品評会を観察するとともに、これまで行った聞き取り調査から、ナンキンの選評基準をまとめてみよう。

理想の体形―ハラガタ―理想の三角形

ナンキンを観賞する上で、基本は体形である。体形として最も重要なのはハラガタといわれる、ナンキンを上から見たときの腹の形である。その理想形が図1-(a)である。まず第一に、口先から腹のもっとも出たところ（ハラダシ）にかけての線が直線であること、第二に、オツツの線とオツツに接する腹の線が直角になっていることが理想形である。つまり上から見たとき、二等辺三角形がナンキンの理想形である。それを「おむすび形のハラガタ」という人もいる。また、この線をダキコミセンともいう。

この理想に近い体形をしたナンキンが、「いい線をしている」「腹の収まりがいい」といわれる。それに対して、腹の線とオツツの線が接するところがはっきりしない体形を、サツマイモのような形をしているところから、イモバラといわれる。

背の形

ナンキンは背びれない金魚であるため、横から見たときの



写真5 ナンキン

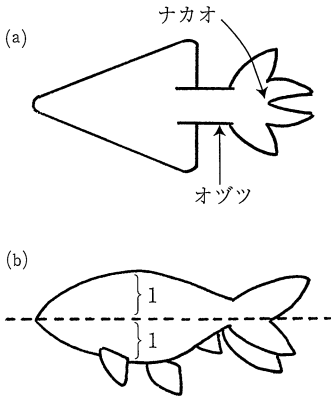


図1 ナンキンの理想形

背の形も評価のポイントとなる。横から見たとき「図1—(b)」、背中が「ツゲの楕形」をしていることが理想である。楕形というのは、背びれのない金魚にはよく言われる表現であり、ランチュウでも見られる。さらに、尾の付け根と口先を結んだ線を中心として、上下が一对一であることが理想である。これもランチュウの選評基準と同じである。背中の方の比率が高くなってくると、腹は張って背骨が伸びてくる状態であり、これを「背が甘くなる」という。

尾の形

ナンキンの尾はヨツオである。ナカオを中心として、先端が分かれており、二枚の尾ひれが左右対称になっている「図1—(a)」。

そして、「堅い尾」ではなく「強い尾」が評価される。強い尾とは、泳ぐ姿において、オツツがしっかりととして、ナカオが中央でできており、両側の尾ひれで水をはじく尾のことである。良い尾のことを「オアジがある」と表現される。

体色

体色による規制はないが、背の形とともに、泳いだときの背の輝きも観賞の上で重視される。背びれがないので、泳いだときの背の光もナンキンの魅力であるという。そのため、背中には赤のない方がよいとされ、腹(フナゾコ)に赤がある方がよ

いという。しかし、背の赤色があつても悪いことではないという。全身が白色のものでもよいが、白色の場合、ウロコの並びの乱れが目立ってしまうという。ウロコの並びがそろっていることを「肌がきれい」と表現される。

不必要なところに出てしまった赤色を落とすことをイロヌキ（人工調色）という。一度赤色を落とすところに、再び赤色が出てしまうことをハゲモドリという。ハゲモドリは評価を落とす。（人工調色については、本誌前号で報告した。）

頭の形（顔）

目から口までの長さの口先が長く、目と目と間の長さの目幅が狭い、とがった顔がよいとされる。

資料・聞き書きナンキンの選評基準

■理想とするナンキンについて、審査員長のSKさんは次のように語った。

ハラの形

ナンキンは背びれがないのが特徴であるので、背中のところがきらつと光るのがよい。だから、背中に赤があるよくない。フナヅコ（腹）のほうに赤がある方がよい。

ナンキンは上から見る魚である。上から見て腹の線が直線に

近い方がよい。魚がしまつてみえる。こういう魚を作ろうと思うと、餌を一日に何回かに分けて、キリエというのをやる。それをやらずに、朝どかんとやつて、夕方またやるというような飼い方をすると、必ず腹がふくれてくる。これを一番嫌うわけである。口先から腹への線が直線に近い方が上位に行く。それはそれだけ努力をしないとできない。

それから、オツツのところと腹の線が直角に近いように収まっているかどうか、それによつてこの腹の線が、ハラガタがきれいにできるかできないかということ。これが斜めにすーつという具合に入っていると、俗に言うイモバラ、サツマイモのように、どこが腹でどこがオツツかわからないようになってしまふ。当歳はお腹が出るのが少ない。それでも腹の収まりが大事である。

尾の形

尾は「ほどよく張つて」という表現で、泳ぐと両方いっしょにひつついてしまうような、弱い尾では具合が悪い。せつかく尾は二枚あるから、二枚びしつとわかるように。それで、尾が、船の櫓といっしょで、この尾ではじくような格好で泳ぐわけ、ということ、尾というのは、堅い尾ではいけないが、強い尾でなければならぬ。この尾の先端まで力が入っているかどうか、力がなくてべっしやつと、両方閉じて泳ぐような尾は弱い、あたり堅くて張つたままだと、今度は尾が使えないので、体の

方を振って泳ぐ、泳ぎが悪いということである。

このナカオがきいて、ほどよく尾が割れていないと、ヨツオではなくミツオになってしまい、水のさばきが悪くなる。ミツオでも大きな魚になると上手に泳げない。尾は半分から三分の一は割れている方がよい。

横から見たととき、昔のつげの櫛、櫛形のような曲線を描いているのがよい。この光が、この辺がでこぼこしていると、正直なもので光がおかしくなる。なるべくきれいな線の方がよい。そうはいっても、四歳や五歳になると、背中線の線が少しはでこぼこしてくる。

ナカオがきいていないと、これをヒラオというが、ナカオがたらつとしてしまうので泳ぎにくくなる。ナカオが真ん中でしつかりときいて、両側で水をはじくような、水さばきのいいような尾がよい。

背の高さ

今年出品された当歳は、全体的にすごく大きい、ちよつと餌いすぎである。ちよつと無理がいつている。今年の魚は高すぎ、高すぎるか低すぎるかということは、この比率とこの比率、尾の付け根と口を結んだ直線の、この比率「 $\frac{a}{b}$ 」が「 $\frac{c}{d}$ 」が一ぐらいいだといいが、背が高くなると、泳ぎが上るようになってしまう。ウロコができるころから、そろそろ背が高くなってくるから、これが高くなりすぎないように、せめて一対一にし

てください。一対一・五ぐらいで止める。これが二ぐらいでなると、今度は背が甘くなりまして、腹が張って、背骨が伸びてしまう、それで背が甘くなってくる。餌いすぎというのはいろいろな弊害が出てくる。痩せたのを急に飼うと、病気で痩せたのが病気が治ると、すごく餌をよく食べるようになるから、そうしたときに、がーと飼うと背が伸びる。

春先に卵を持つ。卵だけ余分なものであるから、金魚は油をすごくためていて、その上に卵が大きくなってくると、また、背中がへっこんだりする。

夏頃から、来年のイチバンコの卵ができています。その卵が吸収されてしまわないように、今年の秋はなるべく遅くまで、金魚が泳ぐ間は餌をやる。この辺では一二月の中頃に寒波が来るから、雪が降ったらそのころに餌やりをやめる。やめたら今度は、雪のおおいをする。

腹を出す

腹を自然に出すのではなく、餌を与えて、人間がいい格好に作ってやる、あそこにいる魚は作ってある。できたのではなく作ってある。

夜明けとともに飛び起きて、朝のうちに、何回切ってやるか、切ってやるほど、満腹感を与えないように、餌をやる、もうちよつとほしいというところでやめて、三〇分くらいしてからまた同じことをやっていく、朝四時半ころから三回か四回餌を切

つて与える。そうやってハラガタを作る。今(秋)から腹を作る時期ではある。

■上位五位までの入賞したナンキンについて、SKさんが一匹ずつ講評した。

親魚・優秀魚

この魚の一番いいのは、この線である。口の先から腹の一番出たところまで、ほとんど直線に近い。それと顔がいい。背もきれいな背をしている。これが一對一・二か三ぐらいでしようか。これぐらいで腹を出しているのがいい。あまり無理せずに、いい腹を出している。これを崩れないように大きくされたらいい。

ひっくり返してみても、ツケチガイ、梶尾が曲がっていると、尾に影響が出る。もし曲がっていたら、あそこはあまり見るところではないので、一番最初のオヤボネを、爪切りでばちと切ってしまうと、それはすぐに直る。全部切ってしまうように、オヤボネほどを切ってしまうっておけば、まっすぐになる。

ただ、ちよつと背中に赤が多すぎる。背中の赤がない方がよいかもしれない。

親魚・優魚一席

この魚は少し年をとっていて、頭のところがなめらかでない。

体だけはまだ若さをもっている。いい線を出している。オツヅがざつと太い。尾は非常にいい尾をしている。強い尾。この大きなオツヅで支えている。背もきれいだ。これだけの魚はなかなかできない。

二席

白地が非常にきれい。肌がきれい。体の線がいまいち。腹の収まりはよい。オアジ(尾のアジ)がない。少し前に出たような格好で後ろに行く。一席の尾の方がよい、あのオツヅがあつてあの尾がある。

三席

純白というには、模様がないので隠せない。このウロコの並びがすごく気になる。線もまあよいが、ナカオが少しききたない。

四席

いわゆるカノコサラサ、非常にきれいですが、肌がきれいで、すこく元気よく見える。少しオツヅが細い。オツヅの長さが少し短い。ちよつと間が狭すぎて、今が精一杯かもしれない。魚が大きくなると、詰まってしまうと、バランスを崩す魚になるかもしれない。

五席

白いところが赤みを帯びたような、ねっからのアカジロという魚という感じ。線はよいが、頭の目先が少し短いところが気になる。もつととがった頭になるとよい。尾アジはよい。少しヤハズといって、尾の割れが尾の尻みたいに割れている。割れているか割れていないかわからないようにしておくとうい。ナカオがきかない魚はあそこが割れることが絶対でないが、ナカオがきいた魚に限ってあそこが割れてくる。

二歳魚・優魚一席

線がきれいな、体のバランスもよい、頭の白のところが、赤い模様を落とした後が、ハゲモドリというが、後から赤いのが出てきている。そのことだけで一番上の最優秀魚に行くわけにはいかない。魚の体形としてはよいが、頭のハゲモドリのために一段下げた。赤を落とさなかつた方がよかつたかもしれないが、それは結果論である。あそここのところが赤が落ちないところで、ウロコ二枚ぐらいのところをやめておいた方がよい。

二席

こじんまりとして、来年は三歳になるが、親魚のところで、そういいところに行かないかもしれないが、こういうタイプはいつもそここのところは確保する。こういう魚は崩れることはあまりない。尾も柔らかい。いい尾をしている。

三席

長めだが、上手に飼っている。目幅と目から口までの長さが同じであると、目先のある魚ということになるが、これはちょっと目先が短い。そのために、口から腹の線が頭のところで崩れていて、顔が少し悪い。もう少し腹を出した方がよくなる。あまりあわてて飼われないように。

四席

案外大きな魚になる可能性がある。というのは、ウロコが少し荒い。ウロコが荒いということは非常に大きな魚になる可能性がある。大きなオツツが背中からどかーんとつながつている、背中が広く見えるような感じがする、それも大きな魚になる素質を持っている。ちょっと飼いすぎて目幅が広がっている。

五席

これも同じ、体形的には大物になりそうだが、もつと腹を出して、水をきれいにし、頭がこれ以上大きくならないように管理したらよい。これもウロコがちょっと荒い方なので、大きな魚になる。

当歳・最優秀

とてつもなく大きくなったという感じがする。育てる過程で急に大きくなったという感じ。背が高すぎるような気がする。

一席

この辺で赤を切っておいた方がよい。背中の方はなるべく白くした方がよい。顔はいい顔をしている。半分の口紅はとってしまつた方がよい。

二席

ウロコがないんじゃないかと思うほど、白地がくつついていく。非常に肌はきれいな魚である。ただ、腹の収まりがちよつと悪い。餌を切つて、キリエをして、ぐつと腹を出させるような飼いをすると、腹の収まりがよくなる。この魚は白くて得している。

三席

短めの魚。急に飼うと、横に腹が出てくるとよいが、上下にも出るので、山が高くて下が深いという魚になると、短い魚になつてしまふ。急激に飼うとお腹も出るが、上下にも出てしまふ。結局、長い魚が短くなつてしまふ。腹は出さなければいけないが、長さも作る。長さはなかなかできない。八月ころまでの間に長さを作つて、これから腹を出すというのがいい。上下のバランスがとれるように。

四席

アクセントをつけて、餌を切つて与える。色が少し薄い。頭

が少し張りすぎ。

*本稿は、平成一七年度科学研究費補助金・基盤研究(C)
(二)「観賞用動植物の飼育・栽培の改造技術にみる伝承的
特徴に関する民俗学的研究」の成果報告(一部)である。